

群 教 セ	G05 - 03
	平16.223集

マルチメディア教材 「ソプラノリコーダーをふいてみよう」 の作成と活用

特別研修員 片山 恭子（吉岡町立駒寄小学校）

《研究の概要》

小学校音楽科のソプラノリコーダーの学習において、自分の能力に応じた曲を選択し、自分で音や運指（ドイツ式）を調べたり、繰り返し個人練習をしたりできるマルチメディア教材「ソプラノリコーダーをふいてみよう」を作成しその有効性を検証した。児童は「できた」という達成感をもち、それにより意欲的にソプラノリコーダーの練習を進め、基本的な奏法と技術を身に付けていくことができた。

【キーワード：音楽—小 ソプラノリコーダー マルチメディア教材 個に応じた練習】

I 主題設定の理由

音楽科では、3年生からソプラノリコーダーが授業に導入され、指導していくことになる。ソプラノリコーダーの学習では、個人の持つ器用さや読譜の能力により演奏技術の差がつきやすく、学習が進むにつれその技術の差が大きくなる傾向がある。実際、3年生の1学期に、リコーダーの学習を始めた頃にはほとんどの児童が、とても意欲的に学習に取り組んでいた。しかし、いったん技術の差がつき始めると、「できない」と感じた児童はなかなか練習が進まなくなってしまう。逆に、「できる」と感じられるようになると自分から進んで学習に取り組むようになり、ますます技術が上達する。そこで、意欲的に学習を進めるためには技術を確実に習得させていかなければならないと考えている。全体を対象とした一斉指導だけで技術を一律に習得させるには限界があり、演奏技術の差を解消するのは難しい。一人一人が基本的な技術を身に付け、「できる」という達成感をもつためには、それぞれの能力に応じた練習をしていく必要がある。教師が一对一で個別指導できれば、もちろん効果があがるのだが、時間的な制限もありなかなか十分な時間を確保できない。現在は、一人では練習のできない児童を中心に教師が個別指導したり、児童同士で教え合ったりしながら、練習を進めている。しかし、児童同士の学び合いは、短時間では効果が見られるが、次第に飽きてきてしまったり、教えるだけで自分自身の演奏を楽しめなくなってしまうといった問題点も多い。

そこで、意欲的に個に応じた練習を進めていける教材、姿勢・指・アンブシュア・音の出し方といった基本的な奏法や運指・リズムといった演奏技術を身に付けることができる教材の作成をしていきたいと考えた。3年生からは楽譜を読んで演奏する技術も要求されるが、読譜ができないことも児童の意欲を損なう一因としてあげられる。そこで、読譜しやすく工夫した楽譜を提示することで、読譜力の不安を解消する支援も同時にできると考えられる。また、ソプラノリコーダーを範奏する際、教師の手元が見えにくく運指が分からないという声が聞かれるので、運指をプロジェクタを用いて提示すれば、より分かりやすく説明ができるとも考えた。

本教材をとおり、個に応じた練習を自主的に繰り返し行うことで、児童は「できる」という達成感を味わい、それがまた次の練習の意欲へと、さらには演奏技術の向上へとつながっていくものと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

意欲的にソプラノリコーダーの学習を進め、基本的な奏法と技術を身に付けるために、個に応じた練習ができるマルチメディア教材「ソプラノリコーダーをふいてみよう」を作成し、授業実践をととしてその有効性を検証する。

III 研究の見通し

自分の能力に応じた曲を選択し、自分で音や運指を調べたり、繰り返し個人練習をしたりできるマルチメディア教材「ソプラノリコーダーをふいてみよう」を作成し活用すれば、児童に「できた」という達成感をもたせることができるであろう。また、それにより意欲的にソプラノリコーダーの練習を進め、基本的な奏法と技術を身に付けていくことができるであろう。

IV 研究の内容

1 「ソプラノリコーダーをふいてみよう」の概要

(1) 教材作成の方針

リコーダーの基本的な奏法の確認と繰り返し個人練習ができる教材をHTMLで作成する。

- 難易度順に曲を並べることで自分の能力にあった曲を選択しやすくする。
- 運指や音を確認しながら演奏できる楽譜を、児童が簡単に操作し練習できるように工夫し作成する。
- 本校の実態に合わせ、運指はドイツ式（ジャーマン式）を用いる。
- リコーダーを演奏するときの基本的な奏法（姿勢・指・アンブシュア・音の出し方）をテキストや図を用いて分かりやすく示す。

(2) 「ソプラノリコーダーをふいてみよう」の構成図



2 「ソプラノリコーダーをふいてみよう」の内容

(1) トップページ

マルチメディア教材「ソプラノリコーダーをふいてみよう」は、大きく分けて「基本的な奏法の確認」と「リコーダー練習曲」からなる。児童にも分かりやすくするために「基本的な奏法の確認」は「まずは基本のチェックから・・・」、「リコーダー練習曲」は「曲にちょうせん!!」という言葉で示した。各ページは、トップページから選べるようにした。

(2) 基本的な奏法の確認

「基本的な奏法の確認」では、リコーダーを演奏する上で気をつけさせたい姿勢・指・アンブシュアや音の出し方などの基本的な奏法をまず簡単なテストでチェックできるようにした(図2)。テストの形式を用いることで、一つ一つ考えながら答えることができ、自分ができているかどうか確かめやすくなるであろう。テスト後、できなかったポイントを再確認できるように、「テスト」のページからはさらに図や簡単な言葉での説明を加えた「説明」のページを設けた(図3)。

(3) 個に応じた練習を進めるための工夫

「リコーダー練習曲」として、児童が一度は耳にしたことがあるようななじみ深い曲を中心に、26曲の単旋律曲と4曲の二重奏曲の計30曲を選曲した。著作権にも配慮し、童歌や各国の民謡、古い時代の作曲家の曲を中心に選曲するようにした。単旋律26曲はおよそ難易度順になるように並べ、教科書の学習の進度に合わせレベル1～2(3年の学習内容)、レベル3(4年の学習内容)、レベル4(4～6年の学習内容)に分けた。それぞれのレベルの中も難易度の順番に曲を並べることで(図4)、自分の能力に応じた曲を選択しやすくなり、意欲を持って分かるまで繰り返し練習できる。また、「レベル5 二重奏しよう」では、難易度の異なる曲を用意することで、いろいろな技術のレベルで合奏を楽しめるように工夫した。それによってあまり技術の高くない児童も、合奏できたという満足感を味わうことができるようにした。



図1 トップページ



図2 基本的な奏法の確認～テスト～



図3 基本的な奏法の確認～説明～



図4 リコーダー練習曲～レベル1～

(4) 繰り返し個人練習できる工夫

各曲のページは、FLASHで作成した。FLASHのタイムラインの機能を用い、サウンドとアニメーションを同期させることで、サウンドの進行に合わせ、五線の音符の色が変わり、リコーダーの運指も同時に変化するようにした(図5・図6)。ボタンをクリックし再生すると拍のカウント後、曲が始まるようにした。図5は初めのシの音符に色が付き、シの運指が示された状態である。曲が進行すると次々と音符や休符の色が移り変わり、それとともに運指が示される。図6はラの音符に色が付き、ラの運指が示された状態である。読譜の補助機能として、階名ごとに音符の色を変えている。自分の分からないところをできるだけ自主的に調べていけるように、音符の色はページ画面の上部に「使う音」として大きな音符で示した。また、再生・停止の機能を持たせることで、待つことなく何度でも再生できるようにし、繰り返し個人練習ができるようにした。

(5) 運指表

さらに補助的な意味で「運指表」も用意した(図7)。調べたい音をクリックすると運指が示されるようになっている。細かく見づらい傾向にある運指表を読むのではなく、気軽に自分で運指が調べられる教材を作ること、この教材集以外の曲にも積極的に取り組めるようにした。

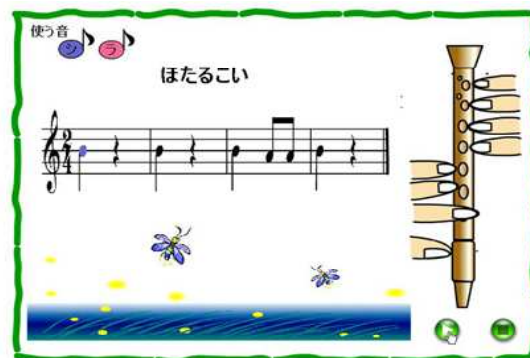


図5 練習曲1～ほたるこい～(シを表示)

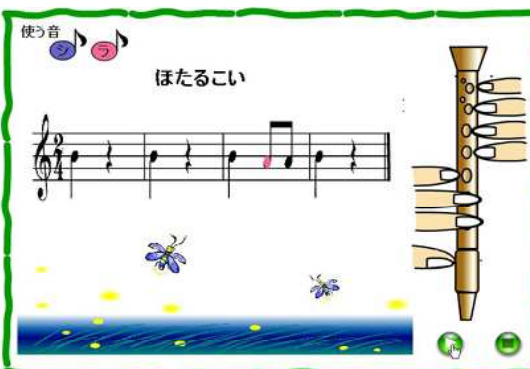


図6 練習曲1～ほたるこい～(ラを表示)

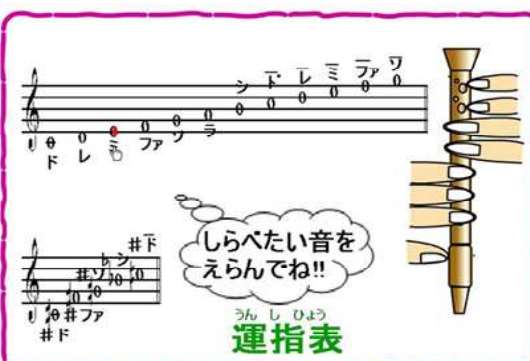


図7 運指表

3 実践の結果と考察

(1) 実践計画 (授業実践)

3学年	単元名/いい音えらんで「習った音で演奏してみよう」(全3時間予定)		10月中旬実施
目標	○ 既習の音(ソ・ラ・シ・ <u>下</u> ・ <u>レ</u>)を使って、旋律を演奏する。 ○ 息の強さやタンギングを工夫し、曲想を生かして演奏する。		
時数	学 習 内 容	指 導 上 の 支 援 及 び 留 意 点	評 価 の 観 点
1	・新しい音(<u>レ</u>)の運指を覚える。 ・「かりかりわたれ」を演奏する。	・裏穴を開けることやその際の運指表の表し方をしっかり指導するようにする。 ・運指や音の出し方を確認し、きれいな響きで演奏させるようにする。 ・プロジェクトで本教材を提示し、見ながら演奏させる。	・ <u>レ</u> の運指を覚え、きれいな音で演奏することができる。
	・今まで習った音(ソ・ラ・シ・ <u>下</u> ・ <u>レ</u>)を使って、曲を演奏する。	・ソ・ラ・シ・ <u>下</u> ・ <u>レ</u> を使って、曲を演奏する。自分でできそうだと思う曲の楽譜を選んで演奏させることで、「できた」という達成感を味わえるようにする。 ・友達や教師に教わるだけでなく、本教材を積極的に利用させ、個に応じた学習ができるよう助言する。特に苦手意識	・意欲的に練習を進めることができる。 ・基本的な奏法に気をつけながら

2 ・ 3	を持つ児童には、本教材の利用を勧め、興味・関心を高めさせるようにする。また、リズムや運指が不正確な児童には、本教材で確認させるようにする。 ・ 基本的な奏法について、まだ身に付いていない児童には、本教材のテストを使うなどして、再確認させるようにする。 ・ 自己評価カードに演奏できるようになった曲を記入し、達成感を味わわせるようにする。 ・ 時間が許す範囲で発表の場を設け、お互いに聴き合い、より達成感を味わえるようにする。	きれいな音で自分が選択した曲を演奏することができる。
	・ 演奏できるようになった曲を発表し合う。	

(2) 結果と考察

授業は、音楽室内に大型スクリーンとプロジェクタを用意し、1時間目に学習した「かりかりわたれ」を全員で演奏しながら、本教材の使い方を教えることから始めた。プロジェクタに大きく映し出す（図8）ことで、児童は、普段教師の指を見て真似て吹くのと同じように運指を確認できることがわかり、教室の後ろにいる児童にも運指がよく見えるようになった。

その後、コンピュータ（5台）と楽譜を用意し、自分の能力に応じた曲を練習させた。単元全3時間中2・3時間目を本教材を利用した学習にあてた。2時間目（10月15日実施）の授業では、コンピュータ5台を並べて設置したため、児童が集まり音が錯綜してしまった（図9）。38名のリコーダーの音がする中で、コンピュータの音源を頼りにするのは無理があるが、3時間目（10月18日実施）では音楽室内に5カ所に分散して設置したところ（図10）、少しは音が拡散し利用しやすくなった。

楽譜とコンピュータ（本教材）のどちらを使うかは基本的には児童に任せたが、普段音楽室では見慣れないコンピュータに関心を示す児童も多く、38名中25名が本教材を使用していた。しかし、コンピュータの台数が5台と限られていたため、コンピュータを使った学習に興味をもっても遠慮してしまう児童も見られた。もう少しコンピュータの台数があると良かったという声が参観した教師から寄せられた。また、自己評価カード（図11）には、演奏できるようになった曲として2時間の合計で3～10曲（平均7.5曲）についての評価が書かれていた。コンピュータを使わない通常の学習では、1曲を仕上げるのも容易でない児童も数名いる中、このような結果が得られたことで、それぞれの児童がほぼ自分の能力に応じた曲を選曲し、「できた」という達成感を味わえたと推測される。授業中の行動観察からも、積極的に取り組めた児童が多く、意欲的に学習を進めることができたことが分かる。

当初、苦手意識を持つ児童に本教材の利用を勧め、意欲を高めさせようと考えていた。



図8 プロジェクタの利用



図9 5台並べて配置



図10 分散して配置

自己評価カード
～自分で学習の成果を振り返り、評価しよう～

学年 3年

学習内容

今日の目標を達成しよう。
① 自分で選んだ曲を練習しよう。コンピュータを使って練習した曲は「コンピュータの使用」のらんに○をつけよう。
② しきいとえんそうのくしきい。きれいな音でできたか（えんそう）のらんに○をつけよう。
A...よくできた B...まあ C...でもまあ
③ 今日の学習についてチェックしよう。 A...よくできた B...まあ C...でもまあ

日付	きけるようになった曲	つみたしきい	えんそう	今日の学習
10月15日	かりかりわたれ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	①・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	②・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	③・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	④・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	⑤・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	⑥・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	⑦・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	⑧・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	⑨・B・C
	おんがけ	つみたしきい ○ B・C	えんそう ○ B・C	⑩・B・C

かたがて、かたがて

図11 自己評価カード

しかし、これらの児童は本教材を利用して個人練習を進めることが困難であることが多かった。実際には、演奏技術の高い児童やコンピュータに興味・関心の高い児童が、どんどん本教材の使用方法を覚え、自分で音や運指を調べ、新しい曲にも積極的に挑戦していた。3時間目にはソ・ラ・シ・下・レ以外の未習の音を用いた曲に取り組めた児童も11名いた。このことから、本教材は発展的な学習にも活用していけると思われる。自主的に学習を進めることのできる児童が本教材を積極的に利用したので、教師の目が個別指導を要する児童に行き届きやすくなり、これらの児童も今までより技術を向上させることができた。

この授業を行う前、この学級には曲をほとんど演奏できない児童が2名、学習した2～3音を用いた曲のみ演奏できる児童が23名、4音を用いた曲を演奏できる児童が10名、未習の音も含め5音以上用いた曲を演奏できる児童が3名いた。授業後は、新しく学習したレを含む5音以上を用いた曲を演奏できるようになった児童が34名おり、これらの児童は技術的な面においても本時の目標を達成できている。また、楽譜だけに頼って演奏すると正しいリズムで演奏するのは難しいが、本教材と一緒に演奏することから正しいリズムで演奏できるようになった。さらに何度も繰り返し練習することで正しい運指で演奏できるようになったり、テストを活用することで姿勢やタンギングなどの基本的な奏法に気づくことができたりした。これらのことから、本教材の活用によって意欲的に学習を進めることで、同時に技術も身に付けることができたと思われる。

授業実践後、自己評価カードを見ると「まだいろいろな曲をふきたかったけど、時間になっていろいろな曲がふけなかったです。」「今日はコンピュータを使って2日目でした。だんだんつかいかたになれてつかいやすくなりました。」「もっといっぱいえんそうしたい。」等の感想もあり、継続的に使っていくことでより効果的になると思われた。大勢で使うと音が錯綜してしまうので、練習を進める中で時と場合に応じて必要な児童のみが使うといった方法も考えられる。そのためにも必要な時にいつでも使えるような環境が必要である。

V 研究のまとめと今後の課題

本研究は、意欲的にソプラノリコーダーの学習を進め、基本的な奏法と技術を身に付けるために、個に応じた練習ができるマルチメディア教材「ソプラノリコーダーをふいてみよう」を作成し、その有効性について検証したものである。

本教材を活用し、自分の能力に応じた曲を選択し、繰り返し練習することで、児童は「できた」という達成感を味わうことができた。それによって、児童はより意欲的に個人練習を重ねることができるようになり、基本的な奏法と技術を身に付けていくことができた。奏法や技術が身に付くことで、児童はより強く「できた」という達成感を味わうことになり、それがさらに次への意欲、そして技術へとつながっていく。その循環を作っていくことがソプラノリコーダーの学習において有効であることが分かった。

今後の課題として、本教材を児童が必要な時にいつでも使えるような環境の整備が挙げられる。音楽室へのコンピュータの常時設置等を考えていきたい。また、本教材のより効果的な活用の方も工夫していきたい。

<参考文献>

- ・三国 和子 著『やさしいリコーダー指導のこつと練習曲』 学事出版（1995）
- ・東京リコーダー協会 編『たのしいリコーダーピポピポ』 トヤマ出版（2000）

※FLASHは、Macromedia.incの米国及びその他の国における商標、または登録商標です。